

空



2006年

**SORA** 13号

晴夜 (13) — 1

柴田 佐知子

雫まだ恠へてゐたる雨の稲架  
絹に置く白刃に冬来りけり  
にこにこと湯ぶねの柚子の寄りきたる

極月や軒をまぶかに漁師町

玄海に花石露の崖せり出せり

凍瀧となりて裾まで汚れなし

阿蘇冬麗揃ひし峰をめぐらせて

―「俳句界」一月号より―

正座して大仏の冷えいただきし

# 大 旦

高倉 和子

石棺の色を封じて山眠る

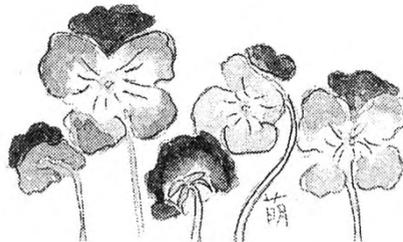
小雪や干魚の口みな開く

盛り塩の煤に汚れし神無月

朽ちてなほ大樹祀られ冬ぬくし

暗闇へ火の粉吸はるる神迎へ

裏木戸のまだ濡れてゐる石露の花



水鳥の湖ごと揺れてみたりけり

襟立てて切羽詰りし顔となる

鱈を売る土間の半分氷りけり

父の字も母の字もある古曆

一筋の雲伸びきつて大旦

連山の煙に歪む初景色

色変へて海の動ける寒さかな

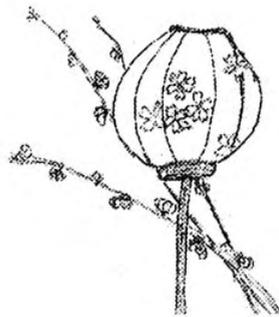
水に倦むこともありけむ寒鯉は

鉄塔に鳥争へる二月かな

# 天窓

中田みなみ

室花や窓の彼方の波ころし  
凧の剥がしかけたるさるをがせ  
梟の誰しも老ゆと鳴いてをり  
一歩出づ舞ひ込む雪に勵まされ  
雪の香の髪となるまで歩きけり  
腰窓の根雪あかりや見舞籠



跳ね炭をよけし衿元匂ひけり

外套を脱ぎて沁々わが家かな

竹林の奥まで見えて冴え返る

沼べりに滲む靴跡猟名残

遠野火や区切りつけねばならぬこと

芽光りの檜山わたる斧こだま

天窓の紐引つ張りて田を打ちに

花蘇枋べつとりと咲き胃の重し

チューリップ捨身となりし開きやう

## 龍の玉

高 千夏子

この冬は点滴台を相棒に

老金魚冬軟水をそそがれて

詩神来よ暖房消えし夜の病棟

空手空拳さあれどと撫づ冬木の芽

冬苺何も判らぬ母でよし

今年誰にも賀状書けずに影を踏む



生くるべし真冬を垂るる蜘蛛の糸  
医療用鬘可笑しき寒の木瓜

われも座す鳴くところ得し冬の虫

室の花老母が肩を揉み呉れぬ

中岡毅雄氏に

冬さうび汝が赤心を賜りぬ

湯たんぽを抱き波乗りの夢見んか

割箸を口もて割りぬ都鳥

寒の月母といのちを分けあひて

パンドラの希望のいろや龍の玉

# 空作品抄

## 柴田佐知子

詩神来よ暖房消えし夜の病棟  
われも座す鳴くところ得し冬の虫  
寒の月母といのちを分けあひて  
我を直視し独自の詩空間を広げられる千夏子さんの今号の作品十五句に衝撃を受けた。一句一句に作者の魂が脈打つ。詩神はまさにここに舞い降りていると思う。養生中のご様子、御加餐を祈り上げます。

高 千夏子

父の字も母の字もある古暦

高倉 和子

今年の数日を残した暦である。この古暦の後には、もう来年の暦が準備され掛けられているかもしれない。和子さんの母上の高倉恵美子さんに「青葉木菟農事暦に余白なし」の作がある。種蒔、田植などご両親の手による多くの書き込みがなされているのだろう。作者の両親への思いがこの句の響きである。

梟の誰しも老ゆと鳴いてをり

中田みなみ

「鳥+木」で梟。昔、梟を串にさして高い木の上にさらして鳥脅にしたことから表された字という。罪人の首をさらすのを梟首というのもここからきたもの。漢字のイメージはあまりよくないが、知恵を象徴する一面も持つ、心ひかれる鳥である。「誰しも老ゆ」と鳴くのは梟のほかにはいないように思えてくる。

足袋はきてすでに手順は決まりをり  
踵をすこし浮かせ鞋をかけてゆく。きりりとした女性像がむすばれてゆく。句の切味が爽快である。

あさなが捷

雪女郎ならば子を置き出られさう

あさなが捷

雪女郎ではない作者は勿論、子を置いて出るはずはない。それを前提としながらも、雪女郎にでもなってしまうかという自在な心の有り様が面白い。

式部居て源氏を見やる曲水の宴

小林 朱夏

太宰府天満宮での作か。平安時代の装いで庭園の上流から流れてくる杯が流れ過ぎる前に歌を詠む優雅な曲水の宴。十二単を着た式部が見やるのは光源氏。ところで朱夏さんが見た紫式部と源氏の君はどのような方だろう。さらさらと筆を走らせる現代の貴人方は、かなりのご年配の方が多いように見受けられるが…。

# 空集

柴田佐知子選

大根引く八十路の力富士日和  
みかん畑好きにちぎれと秤置く  
斧あぐる枯蠅螂の踏まれけり  
寒鴉ゴールにランナーもつれこむ  
賑ひて炭焼体験終りけり  
新巻を吊し父権のありし頃  
冬の虹百三歳を送りしと  
冬木影中也詩集を隠し持つ  
一月や鼻より明くる阿蘇寝釈迦  
雪女後ろしざりに消えにけり  
寒立ちの鹿に天まで日本海

福津

野畑小百合

福岡

吉村しやうご撰護